Memoirs of Beppu University, 62 (2021)
～新制大学創立70周年記念～

別府大学建学の精神「VERITAS LIBERAT」

―ロゴデザインの変遷及び墨蹟「円通」との関わり―

仲　嶺　真　信

【要　　旨】

ギリシアの学問に精通し、かつ詩人でもあった佐藤義詮は、大学のロゴやバックルのデザインの基盤をギリシア世界に求めていた。抒情詩人の象徴の竪琴（LYRA）は無論、建学の精神 “VERITAS　LIBERAT” を象徴するロゴデザインの中にオリーブ（平和・知恵・自由等の意）を添え、その全体の輪郭の 16 条光芒は、ギリシア由来の太陽と見立てていた。また「円通＝真理と自由」は、“VERITAS LIBERAT” という高遠な精神と融和していた。

【キーワード】

“VERITAS LIBERAT” ギリシア古典　竪琴　オリーブ　円通

【はじめに】

「VERITAS　LIBERAT　真理はわれらを自由にする」は、佐藤義詮初代学長（以下「VERITAS　LIBERAT」は “VL”、「佐藤義詮初代学長」は、佐藤義詮と略す）の信条を表明した言葉である。この典拠について、佐藤瑠威前学長の見解を要約して示すと、以下の通りである。即ち、国立国会図書館法の前文にほぼ同一の文句『真理がわれらを自由にする』が確認されるが、この図書館法ができたのは昭和 23 年であり、別府女学院時（昭和 21 年佐藤義詮が創設）には既に使用していたので典拠ではない。そこで別に典拠を探索すると、『ギリシア・ラテン引用語辞典』の中に “veritas liberat ” という言葉が、「真理は我々を自由にする」という訳とともに書いてあったこと、しかもこの書物が、佐藤義詮蔵書（昭和 17 年出版）であったこと等が判明した。故にこれが本学の建学の精神の典拠となった可能性が高い（注１）。

ところで、佐藤義詮記念館所蔵品「バックル」には、円環状に並ぶ “VL” 文字（VL は正立像、各語頭と語尾間に中黒点を１つずつ２箇所配置）をはじめ、ギリシアの「竪琴（LURA）」（その中に Beppu の B を示すイニシャル１字及び 1946 年銘）が表現された記念品（裏に年紀と別府大学銘があり、実際は 1969 - 72 年制作）が残っている（図１）。しかし、これは別府女学院開設（1946：昭和 21 年）期のものではなく、別府大学創設（1954：昭和 29 年）以降の 1969 - 72 年制作である。ただし、別府女学院開設時には、既に “VL” が合い言葉として使われていた（注２）ものの記念品等の証拠は確認できない。とは言え、その頃と推測される竪琴型バッジが二種あり、図１の「竪琴＋ B 文字のみ」を抜き出した形（図２）が残っている（注３）。

１．ギリシア詩と竪琴の関係

以下では、なぜ“VL”と共に「竪琴」がデザインされたのかについて考えてみよう。佐藤義詮は、ギリシアの学問、特にギリシア文学及び思想に精通し、研究書も詩作も遺されている。例えば、ギリシアの学問について謙虚にこう語っている。「私が興味をもって勉強したのは、ギリシアの学問である。私は自分のことをギリシア文学の専門家だとは思わない。ただ、ギリシア文学に愛着を感じて、初めサッフォーやアナクレオンの叙事詩を読み、次第にギリシアの学問に深入りしてしまうことになった」(注４)。とりわけギリシア抒情詩への思慕と鑽仰の結実は、次の著作に顕現している。佐藤義詮『LYRA　GRAECA 古希臘歌謡考』（金洋堂書店 昭和９年　以下『古希臘歌謡考』と略す。）(注５) 及び『希臘古代詩序説』（第三書院 昭和 11 年　以下『希臘詩序説』と略す）を基本として、特にギリシア歌謡・詩及び神話の視点から「竪琴」の意味について探ってみよう。英語の「Lyre」は、古代ギリシアの竪琴を示し、また「Lyric」には、叙情詩、あるいは竪琴（lyre）の伴奏で歌うための、などの意味がある(注６)。『古希臘歌謡考』に見られる「LYRA」は、ラテン語表記で古典ギリシア語由来の名称であり、「竪琴」･「抒情詩」の意味を包含する。『古希臘歌謡考』の表紙裏・中表紙等の挿図に、リラ型弦鳴楽器として“Lyra（ﾘｭﾗ）”、“Barbitos（ﾊﾞﾙﾋﾞﾄｽ）”等の竪琴、また“Aulos（ｱｳﾛｽ）”と呼ぶ双管竪笛等の演奏者が見える（図３・４）(注７)。この点からも佐藤義詮の竪琴に寄せる強い思念が漂い、かつ古典ギリシア文化及びラテン語に対する造詣の深さ、さらに詩人としての感性の豊かさや矜恃が窺い知れる。例えば上記二著の他に、佐藤義詮詩集『玻璃幻影』（玻璃幻影刊行会 1988 年　以下、『玻璃』と略す）において、ギリシアの代表的女性抒情詩人・サッポオ（ｻｯﾎﾟｰ、ｻｯﾌｫｰ）が自身の閨房を詠む詩(注８)をはじめ、同郷レスボス島の同時代の詩人アルカイオスが、詩女神（ムーサ）サッポオに賛辞を捧げた詩(注９)等の佐藤義詮訳が、独特の七五調（五七調）で、且つかな文字多用で披露されている。「LYRA」を弾じ詠んだサッポオの歌に「いざ、神さびたる我が琴よ、高らかに鳴りて、歌なせよかし」があり、「竪琴に呼びかけて数々の詩を生んだサッポーが詠ったのは、もっぱら愛の歌、それも多くは彼女自身の恋心に関わるものであった」と沓掛良彦は指摘する(注10)。すなわち古典ギリシアにおいては、竪琴と詩人及び抒情詩が、極めて密接な関係にあることが分かる。

さて、ここで高津繁春『古代ギリシア文学史』を覗いてみよう。ホメ－ロス以前の詩について、高津はこう述べている。「最古の叙事詩は竪琴の伴奏の下に歌われた、一種のバラッドとも言うべきものであって、弾唱者は、伝承された古い歌と共に、また自作の歌も歌った」(注11)。また高津は、「歌謡」･「抒情詩」と「Lyra，Lyre（竪琴）」との関連にも触れている。

「ギリシアの詩は、古くはエレゲイアやイアムボスがそうであり、叙事詩でさえがかつてそうであったように、楽器の伴奏によって本当の意味で歌われたものであった。抒情詩が Lyricos 即ち『琴（リュラ）の』と呼ばれているのは、このためである。この名称は（中略）、古くは更に明らかに『歌謡』（Melos）と呼ばれ、詩人は同時に音楽家でもあった。楽器は琴と笛であった」(注12)（＊下線及び強調は、以下全て仲嶺加筆）。この指摘から佐藤義詮の示す「歌謡」は、「抒情詩」の古い呼称であることが分かる。さらに高津は、劇場での上演に際し「独吟歌の伴奏は竪琴、合唱のそれは笛であった」(注13) と指摘している。

前掲書において佐藤は、歌謡及び詩と琴（LYRA）が緊密な関係にあることを詳論している。後掲“VL”ロゴデザインに「竪琴」及び「オリーブ」の表現が見られるので、先にそれに関する佐藤義詮の認識を確認しておく。「竪琴」と「オリーブ」について、佐藤義詮はこう述べている。「ギリシアには国民的な祝祭の行事として４つの著名な競技があった。その１つは今日オリムピック大会として復活されているオリムピア祭で、これはオリムピアの地でヘラクレスによって始めら

れたものとされその第１回は紀元前776年に始まり４年毎に開催された。その第１回の年がオリムピアード第１年でギリシア歴年をあらわしている。その勝利者の栄冠はデルプォイの神託によってオリーブの冠が与えられた。その２のピュティア祭は紀元前582年に始まったものでデルプォイで８年毎に行われ竪琴や竪笛などの演奏を主としたいわば音楽祭である」(注14)。すなわち、古代ギリシアでは、オリンピア祭の勝利者にはオリーブの栄冠を与え、ピュティア（音楽）祭では竪琴や竪笛が演奏された訳で、本学の後掲のバッジデザインの淵源もここにあるものと考えられる。

さらに、竪笛及び竪琴に関して『希臘詩序説』は次のように述べている。

「古代ピュティア競技の記述を続けてパウサニアスは、次の様に語つてゐる。デルポイの最初の競技が音楽や詩などであつたこと、またピュティア暦第１年（紀元前586年）までは体育に関するものはなく、此の年に及んで同時に古来の竪琴歌唱を除いて、竪笛歌や竪笛吹奏楽なども包含されて拡大されたこと、（中略）ピュティア暦第８年に竪琴弾奏の競技は近隣同盟会議の勧誘によつて設けられるやうになつた。かくてアルカイオスの『アポロン讃歌』にはデルポイ人が雅歌を竪琴に合せて唄ひ舞ふ有様が描かれてゐる」(注15)。即ち、古代ギリシアでは競技として、音楽や詩があり、竪琴を弾じ歌を唄い舞うことに言及している。佐藤義詮の竪琴に関する認識は厳密で、以下の通り考証を深めている。

「合唱詩には竪琴と竪笛の何れの楽器も使用されたが、舞踏合唱隊に伴奏されたと思はれる竪笛頌歌を除いた単唱詩には竪琴が用ひられた。竪琴を意味する最も一般的な言葉はホメロスの中ではPhormigx（＊Phorminx：仲嶺挿入）であり稀にはKitharisも見へるがLura, Khelus, Barobitosなどはずつと遅れて生じた。（中略）古代人は縷々Kitharaをアポルロンに、Khelus又はKhelunnaをヘルメスと結びつけて区別してゐる。ホメロスにおける『リノスの唄』の奏者はPhormiggi Kitharizein（中略）と言はれ 、Phormigxと Kitharisとはホメロスの聴衆には同じものであつたことを示してゐる。luraなる語はアルキロコスに初めて見出されてゐる。BarobitosとKhelusとは恐らく元来希臘抒情詩のアイオリス系統に、Kitharaはイオニア系統に属したものであらう。リデュアの〝pectis〟はサプポオの時代に希臘に新らしく現れたと考へられる。名称の相違は多くの場合、形式と音階や音節の相違を示してゐる」(注16)。

ところで、図１・図２の竪琴の名称を調べると、以下の事柄が判明する。古代ギリシアの楽器として、①キタラ　②ハープ　③リュラ　④バルビトス　⑤アウロス　⑥シュリンクス　⑦フォルミンクスがある。ここで①②③④⑦が所謂「竪琴」である。この中で、①キタラ及び⑦Phormigxの輪郭が、図１・２の竪琴型と近似している（図５-①／図５-②）(注17)。ちなみに伝説では、ホメロス以前の詩人で、音楽家として有名なオルペウス所持の竪琴が漂着したというレスボス島。同島は同時代の代表的詩人として、サップオとアルカイオスを輩出している。ギリシアのクラテル（混酒用の器）に「サップオとアルカイオス」が描かれており、両者の手には竪琴（Barobitosバルビトス）が握られている（図６）(注18)。正しくレスボス島は、竪琴伝承で名高く、当時の詩人は同時に音楽家でもあり、竪琴は詩人必須の楽器であったと言えよう。故に、ギリシア抒情詩に魅了され、かつ詩人魂を持つ佐藤義詮にとっても、竪琴は、最も身近で存在価値の高いものと考えていたに違いない。

２.「Lyre（LYRA）」に関わるギリシア神話及び文学と大学の印刷物

大学ニュース「アルゴノート」関連

かつて「別府大学ニュース　アルゴノート（Argonautes）」(№.１ 1965年）が発刊され、№.７か

ら「別府大学通信　アルゴノート」と改名し再出発したが、1968（昭和43）年№9をもって休刊した。現在その名称は、図書館報（1978年№1発刊）として継続中。休刊から継続に至る経緯について、当時の林章館長は以下の通り記す。要約すると、『旧学園通信』の発行が止まっていることは、残念である。この『ｱﾙｺﾞﾉｰﾄ ARGONAUTES』という名称の由来は、もともとギリシア神話にちなむ「アルゴ船の乗組（ARGONAUTES）」をさす言葉であり、彼らが様々な冒険を行い、幾多の苦難を乗りこえて、見事に目的を達成する、という物語である。附属図書館も同様に苦難をを乗りこえて、立派な図書館に育つには、まことに名も良くふさわしいので、図書館報に襲名した[注19]。

ARGONAUTESは、いかにも、ギリシアの古典に精通していた佐藤義詮の学識及び情念を披瀝したものと言えよう。高津春繁は「イアーソンとともに人類が最初に造ったといわれる大船アルゴーに乗って金の羊毛を求めに赴いた英雄たち。ｱﾙｺﾞﾅｳﾃｰｽ Argonautesは、アルゴーの乗組員を意味する。この冒険譚はすでにホメーロスにおいても周知の物語のごとく扱われ、ギリシアのもっとも古い話の一つである」と述べている[注20]。このアルゴーの乗組員たちの中に、詩人で音楽家、竪琴の名手・オルペルスがいる。例えば楽人姿で「トラキア人の間で歌うオルペウス」を描く壺絵がある。即ち岩に坐し竪琴（８弦Lyre）を奏でるオルペウス、その頭には対生する葉を付けたオリーブ冠を戴いている（図７）[注21]。本学「アルゴノート」の命名は、紛れもなく、佐藤義詮のギリシア古典から得た豊かな学識に由来する。即ち、詩人で音楽家としても高名なオルペウスについて熟知していたものと考えられる。ちなみに、オルペウスと“Argonautes”との関係は、以下のとおりである。

【オルペウス】

「ホメーロス以前の最大の詩人で音楽家。（中略）アポローンより竪琴を授けられ、あるいはみずから竪琴を発明した（あるいはその弦を７本より９本に増加）し、歌と音楽の巨匠となり、彼の歌に野獣も山川草木も聞きほれたという。彼はアルゴナウテースたちの遠征に参加し、音楽によってオールのビートを取り、荒波をしずめ、サモトラーケー Samothrakeの秘教にアルゴー船の勇士らを入会させ、セイレーンたちの魔法の歌に対抗して自分の音楽によって彼女らを破り、無事この難所を通過した」[注22]。

３.「VERITAS LIBERAT」のロゴデザインの変遷と意義

（１）バックルに表現されたロゴデザイン

大学発行「ｱﾙｺﾞﾉｰﾄ」が、ギリシア神話に由来する名称であったことは既に述べた通りで、“ARGONAUTES”の一員に竪琴の名手オルペウスがいた。また既に「VL」の文字と竪琴が併置され、弦の位置にイニシャル“B”一字と1946の紀年が配置されている例（図１）、及び竪琴型バッジ（竪琴＋Ｂ一字のみ　図２）を紹介した。さらに別のバックルデザインに、明らかにギリシアの四頭立て馬車と“Beppu University”（以下“BU”と略す）銘が見られる（図８-①）。この典拠は、ギリシアの「戦車と戦士（図８-②）」にあるが、厳密な模作ではない[注23]。図１は、バックル裏に４種の年紀と別府大学銘があり、実際は別府女学院開設（1946年）期の制作ではなく、別府大学創設（1954年）以降の1969－72年制作と判断される。

ところで、バックル表に“VL”銘のみ、裏に「別府大学」銘のみのデザインがある。一つは、円環状に“VL”を配置（VLは正立像、各語頭と語尾間に中黒点を２箇所配置する）例（図９）、二つは、“VL”（全14字）を横並びで上から下に向けて４字ずつ３段＋２字を配する例（図10）がある。

いずれも裏面に「別府大学」銘があるので、図１同様1954年以降のある時期に制作されたものと推測される。

ここで“VL”の書体について触れておこう。根之木英二教授のご教示によると、書体は、フィンランド人Tuukkaという作家のFunky&Bouldと呼ぶもので、現在Web上でフリーのフォントとして使用されている。デザイン化された文字スタイルとみられ、このように文字を幾何学的な形態にするのは、アールデコの時代（1910年代半ばから1930年）に流行したと考えられる。根之木教授は「モダンデザインの流れを汲んで幾何学的に処理された文字」と指摘する。おそらく、当該の“VL”ロゴデザインの創案者が、この書体に“VL”の意義を托し選定したものと推測される[注24]。

図11は、バックル表下段に“BU”を置き、上段の「VL（正立像）」では、前半と後半の文字間に横長の十字形光芒を配し、裏面に「卒業記念　別府大学」と記す例である。なお、ローマ字は、Old Englishフォントの一種である。バックルは、別府大学創設が1954年であり、その第１期の卒業記念品と見做せば、４年後の1958年頃の制作と推測される。図12は、「VLと四弁花をセットにした16条光芒を放つ」円環型ロゴデザイン付きバックルである。前例とは異なり、全く新しいタイプのデザインを示す。これは、図11タイプから派生・発展したデザインと考えられる。ここで図12のバックルから、円環型ロゴデザイン部分のみを独立させた形態を、便宜上「VL・花・16光芒・円環型」と呼称する。単独のバッジ・デザインとして表現されたものが、図13及び図14（長いピンバッジ：金色円環型の中央円内に朱玉嵌入）である。図13バッジの裏面に「別府大学」銘があるので、図８同様1954年（別府大学創設）以降のある時期に制作されたものと推測される。管見の限り年号が確認できる「VL・花・16光芒・円環型」ロゴデザインは、1960年度以降の印刷物（実際は1959年印刷）に見える。故に、この成立年代は、1959年以降と推測される。因みに「1960-61年度用の別府大学入学案内書」に印刷されたロゴデザインは、①“VERITAS”②“LIBERAT”の文字はそれぞれ２分され７字ずつ右旋方向の順に配置される。ただし、アルファベット文字の上（天）部は、両者とも外周円の縁に隣接するので、固定した一視座から見ると、円環型の中で両者は相対して倒立の関係にある。しかも“VERITAS”と“LIBERAT”との、それぞれの語頭・語尾に小さい四弁花を２つ配し、共有している（図15）。

（２）円環型ロゴデザインⅠ（VL倒立像・オリーブ花）

さて「VL・花・16光芒・円環型」ロゴデザインについて、結論を先に述べると、四弁花は「オリーブの花」[注25]を表し、一方の16条光芒は、「太陽」の象徴と考えられる。

オリーブの花言葉は、「平和」や「知恵」が有名である。オリーブは、モクセイ科に属し「西アジア原産で、地中海地方で広く栽培される常緑の果樹。葉は短柄で対生し、細長いだ円形。黄白色の小花（＊四弁：仲嶺挿入）を多数つけて芳香がある（図16-①・図16-②）[注26]」。ギリシア神話では、アテネ（ローマ神話ではミネルバ。知恵と道徳を支配し、農業を守る）女神が、ポセイドンと都市の支配権を競った時にオリーブを植えたことで有名。アテネ女神の祭典の競技の勝利者に与えられる冠は、オリーブの枝で作られる[注27]。また、「豊穣」「力」「勝利」「平和」「光」「聖樹」等の象徴とも言われる[注28]。さらに次のような象徴でもある。「オリーブはギリシアの国樹とされるが、クレタ文明の壁画にも描かれ、神話では女神アテネによって生み出される。アテネの政治家ソロンは、自由、希望、慈悲、純潔、秩序の象徴としてオリーブの植林を立法し、市民の庭にはオリーブが多く植えられた」[注29]。故に当該の四弁花は、オリーブ由来の象徴と関連づければ、「平和」「知恵」「勝利」「光」「自由」「希望」等の含意が認められる。

一方、16条光芒は、以下の通り太陽（日輪）を象徴していると推測される。例えば、ヴェルギナ（マケドニア王国の旧首都）の太陽と呼ばれるフィリッポス２世の納骨箱（前330年頃　テッサロニキ考古美術館所蔵）の表には、正に16条の金色の光芒を放つ太陽（図17）が象徴的に表現されている。1977年に発見され、当時のマケドニアの紋章（太陽）を表現した一例と考えられる[注30]。同様に16光芒を放つ太陽と推測される文様は、アテネのパルテノン神殿に前後した時代に建造された、ヘファイストス神殿（前460-前450頃）天井にも確認される（図18）[注31]。この他に、アッティカ派赤像式萼形クラテル（混酒用の器）断片の中に「ヘリオスの頭上に金色に輝く16光芒の太陽」[注32]及び赤像式壺絵の「４頭立馬車を引く太陽神ヘリオス」[注33]等が確認される。

以上の事例から16条光芒は、太陽の光輝を表現・象徴したものと考えられる。故に「VL・花・16光芒・円環型」ロゴデザインの構成要素の中の「四弁花と16条光芒」は、ギリシアの古典的知識を咀嚼した上で、デザインとしてアレンジした象徴であり、建学の精神の源泉「真理と自由」を再認識する点において、極めて核心をついており看過できない

さて便宜上、このロゴデザインを円環型ロゴデザインⅠ（VL倒立像・オリーブ花　図13･14･15）とした。この系譜は、以下の数年間にわたり使用されていた。列記すると、1960-61年入学案内書、1962年入学案内書、1963年大学祭パンフレット、1968年学生募集記事（大分合同新聞12月23日朝刊）、1968年アルゴノート、1969年入学案内書、1972年入学案内書、1979年19号（第１体育）館演壇正面（図19）[注34]、1986年創立80周年記念式典演壇設置（第１体育館　図20）[注35]、1988年同窓会バッジ（図21）[注36]、これを最後に、新しく今日の円環型ロゴデザインⅡ（VL正立像・中黒点　図24）に替わる。ただし、別府大学同窓会会員名簿には、1992年まで「VL倒立像･オリーブ花・16光芒」円環型が印刷されていた（図26）。また興味深いことに、今日のロゴデザインに替わる中間において、いまだ四弁花を維持し、“ VL”は無回転で見れば正立像として表現された例、すなわち、1965年入学案内書、1967年学生募集ポスター（図22-①・②）、1973年河内一郎デザイン同窓会バッジ（図23）[注37]等が確認される。

（３）円環型ロゴデザインⅡ（VL正立像・中黒点）

現在の別府大学が広報等で表示する円環型ロゴデザインは、固定した一視座から見ると、中央円形の真上に“VERITAS”、その真下に“ LIBERAT”を配置（両者は正立像）四弁花の代わりに中黒点でバランスを保っている（図24）。現在のロゴデザインの中黒点のみを1960-61年系統デザインのオリーブ花（四弁花）に置き換えれば、1965年・1967年及び1973のロゴデザインとなることが分かる（図22-①・②／図23）。換言すれば現在のロゴデザインは、「VL・花・16光芒・円環型」の「花」を「中黒点」に換え、VLを正立像とし、かつ16光芒のみを継承･維持している。これを「円環型ロゴデザインⅡ」と仮称する。

この系統のロゴデザインの流れは、1992（平成４）年度大学案内書（図25）から確認され、今日に至ることが分かる。通常大学案内書は、前年度に次年度の印刷を行うので、1991年に新ロゴデザインが誕生したと見てよい。事実1991年に『別府大学通信№40　1991　SUMMER』に新ロゴデザインが確認される。ただし、1992年印刷の同窓会会員名簿には「円環型ロゴデザインⅠ（VL倒立像・オリーブ花　図26）」が未だ残っている[注38]。

（４）円環型ロゴデザインⅢ（VL正立像・別府大学・オリーブ枝葉・大日）

さて印刷物でしか確認できないが、1965-1968年頃は円相内上部に“VL”（ゴシック体、正立像）

及び下部に漢字の大学名が表記され、中央空間には、奇抜な「大日（臼杵石仏）」像ロゴデザインが見られる。この例で四弁花は、オリーブの枝葉に置換されている（図27-①）[注39]。ここでは16条光芒表現はないが、仮に円環型ロゴデザインⅢと名づけておく。これは管見の限り、1965年から1968年にかけて『アルゴノート』及び大分合同新聞（図28　1965年11月26日夕刊）紙上の募集案内にも確認される。この時期、賀川光夫教授が文学部長の任にあった[注40]。このデザインには、賀川教授の豊かな学識と理に適ったアイデアが反映されていると推測される。奇抜なロゴデザインを採択した経緯には、“VL”と通底する内容を了解した佐藤義詮の度量の広さと英断もあったと考えられる。因みに賀川教授は、1955年と1956年の２年間、九州大学の谷口鉄雄教授と戦後最初の臼杵磨崖仏の調査を実施しており、それ以来、2001年に至る長い間、臼杵磨崖仏の調査研究及び保護に深く関与し続けた考古学かつ仏教美術に精通した学者、特に臼杵磨崖仏研究の先覚者である。

ともあれ、仏教において大日如来（金剛界）は、文字通り「太陽」の如き尊格を示すもので、意味は「悟り（真理）」・「智慧」を表し、別名「大盧舎那仏」ともいい、漢訳では「光明遍照」と称す。即ち「光明」を象徴し、ギリシアの太陽神とも重なる。例えばアポロンは「音楽、医術、弓術、予言、家畜の神、また光明の神としてポイボス〈輝ける〉なる呼称を有し、ときに太陽と同一視される。要するに彼はギリシア人にとって、あらゆる**知性と文化の代表者**であり、律法、道徳、哲学の保護者でもあった」[注41]。あるいは「ヘリオス同様、太陽光線を象徴する黄金の弓矢を持つアポロンは、やがて太陽神と混同され、ヘリオスと同一視されるようになった」[注42]。

さて円環型ロゴデザインⅢは、円相を表し、その中心に「大日」を配置しており、正に曼荼羅の中央に君臨する大日の安置法に近い。ちなみに曼荼羅は、「神聖な壇に（領域）に仏・菩薩を配置した図絵で宇宙の真理を表したもの。本質・精髄の意で、輪円具足と訳す（中略）。大日如来のさとりの境地を図画したものであり（後略）」[注43]。金剛界曼荼羅においては、９分割した正方形のそれぞれに大中小無数の円を整然と配し、中央の成身会（根本会）と呼ぶ大円相の中央に大日が君臨しており、さらに諸仏の一尊一尊が、月輪と称される円相内に収められている。この金剛界曼荼羅の構図について、内田啓一は「方形の究極かつ完全なる姿が正方形であり、不規則な形の究極かつ完全なる姿が円である」と指摘する[注44]。通常仏教では、圓（まる）は、悟り（真理）を意味することが多い。例えば「円覚」は「完全無欠で完全なさとり」。「圓圓」は「完全にまるいこと、即ち**大日如来の絶対智である大円鏡智**」を意味する[注45]。故にオリーブの象徴する複合的的意味、即ち「知恵」「光明」等とも重なる。円環型ロゴデザインⅢの構成内容は、“VL”の意味と絶妙に合致している。つまり、オリーブの花及び枝葉には、「平和」「知恵」「光明」「自由」等の象徴的含意がこめられていた。

ところで、「アルゴノート」は、№８の表紙にも№１と同様の大日を中心に配するロゴデザインが使用されている。注目すべきは、同誌№８の４頁（図27-②）において、先述の「VL・花・16光芒・円環型（円環型ロゴデザインⅠ）」が、「VL正立像・別府大学・オリーブ枝葉・大日」のロゴデザインと併存し、同時に使用されていることが判明する。併存の意味については、次に新たに考えていこう。

４.「VERITAS　LIBERAT」と墨蹟「円通」

本学所蔵の墨蹟「円通」を調査したところ、「円通」は、当時大分の禅刹万寿寺を退住し、浜松の方廣寺（臨済宗、正式には深奥山方廣萬寿禅寺）管長に就任就した足利紫山（1859-1959）老師

95 歳の時（1954 年）の揮毫であることが判明した（図 29）[注46]。

1954 年は、別府女子大学を改称・改編し、新たに男女共学の別府大学が創設された記念の年である。大学当局が、新たな大学の門出と発展を祈念しての揮毫を求めたものと推測され、墨蹟「円通」は、極めて重要な記念碑的意味を帯びている。下記の通り「円通」は、本学建学の精神を漢字二文字に短縮し象徴しているものと言えよう。前掲の大日如来（金剛智を象徴）を配したロゴデザインと共に墨蹟「円通」が、密接な関係で呼応し共存することの意義に奇縁を見出すことができる。

辞典においては、「円通」は、以下の通りの意味を持つ。

1）円通（えんづう/えんつう:「周円融通」の略　仏語。智慧によって悟られた絶対真理は、あまねくゆきわたり、その作用は自在であること。また、真理を悟る智慧の実践[注47]。

2）円通（えんずう）は、①周円融通の略。真如の理（悟りの境界）はあまねく行き渡って妨げのないこと。仏・菩薩によって悟られた絶対の真理は、あまねくすべての存在に行き渡っており、その作用は自在で妨げるものなく、すべての存在にはたらいているという意味。『首楞厳経』巻五によれば、聖者が智慧によって真如の理を悟る実践をも円通という[注48]。

3）「円通（えんずう）」は、①絶対の真理は、すべてのものにあまねくゆきわたっている、の意。周円融通の略。仏・菩薩のさとりの境地。心性は普遍であることを円といい、その妙用が自在なことを通という[注49]。

以上のことから、「円通」は、「真理はわれらを自由にする」の精神と融通していることは明瞭である。二語の意味は「円＝真理」、「通＝自在（自由）」という明解が得られる。他方、キャンパスの古地名「円通寺」の「円通」と関連付けて考えると、なおさらに意味深長である。あたかもそこに宿る「地霊（Genius Loci）」に大学が呼び寄せられたかのように霊妙に呼応している。

おわりに

既に “VL” は、『ギリシア・ラテン引用語辞典』を典拠としており、また別府女学院時代に “VL” は合い言葉として使われていたことも指摘した。さらに女学院時代と推測される竪琴（Lyre）型バッジ以降、バックルをはじめ、数種の “VL” バッジの内容や変遷についても言及した。図 1 のバックルは、“VL” と「竪琴型中 B 一字・1946」が確認されたが、別府女学院開設期（1946 年）のものではなく、別府大学創設（1954 年）以降の 1969 - 72 年に女学院時代を記念しての制作であった。ただし竪琴（Lyre）型バッジは、女学院期にデザインされたものと推測した。根拠の一は、昭和実践女学校のバッジに求められる。即ち別府大学の前身の豊州女学校（明治 41：1908 年開設）名を昭和実践女学校と改名（昭和 4 ：1929 年）後の昭和 11（1936）年、佐藤義詮は、昭和実践女学校の校主となり、経営の責任を負うことになる。その昭和実践女学校のバッジとして「花柄の円バッジ（昭和の字を蕾に籠める）」[注50]が作られており、故にシンボルとなるバッジ制作は、別府女学院期にも継承さたものと考えられる。根拠の二は、昭和 9 （1934）年刊『LYRA GRAECA 古希臘歌謡考』にある。書中には「抒情詩及び竪琴に関する叙述や挿図」が確認され、故に女学院開設までの間も佐藤義詮の “LYRA” への思念は消えることなく、むしろ高揚しかつ沸々と湧き出していたものと考えられる。抒情詩を扱う『LYRA GRAECA 古希臘歌謡考』にあえて「歌謡（Melos）」の名称を使った理由は、沓掛の「歌謡＝抒情詩」という指摘からも首肯される。即ち「『歌・歌謡』と呼ばれた本来の抒情詩は、レスボス島で生まれ、作者である詩人みずから竪

琴に合わせて歌う『独吟抒情詩』（ﾒﾛｽ）と、詩人が作詩作曲しかつ振り付けをおこなって、しばしば大規模な合唱隊に歌わせる『合唱抒情詩』（ｺﾘｺﾝ・ﾒﾛｽ）とに二大別される」(注51)。このような希臘の古典に精通し、かつ詩人でもあった佐藤義詮は、“LYRA”の由来も意義も熟知していた。故に筆者は、女学院期のバッジに、それが色濃く反映されていたものと判断した。

“VL”ロゴデザイン中の四弁花は、オリーブが示す象徴と関連づければ、「平和」「知恵」「勝利」「光明」「自由」「希望」等の含意が認められる。オリーブの表現は、“VL”の意味とも重なる「自由」及び「太陽」を象徴する「光明」とも呼応している。

一方、ロゴデザイン中の16条光芒は、太陽の象徴と結論づけた。特にオリーブ付き円環型ロゴデザインは、ギリシアの学問的知識を咀嚼した上で、理想を寓意で仄めかしつつ、建学の精神の根本的動機を表明するものであり、最高学府の象徴として稀有でかつ優れている。佐藤義詮は、建学の精神についてこう述べている。「戦前戦中を通じて自由と真理は弾圧されてきた。これからの日本は真理を求め、自由を愛する若者を育てていかなければならない」、「『真理はわれらを自由にする』の自由は、人間性の尊重であり、真理の探究は学問の最終目標なけらばならない」と(注52)。

円環型ロゴデザインⅢの大日は、漢訳では「光明遍照」と称され、即ち「光明」を象徴しており、意味の上でギリシアの太陽神とも重なっていた。特に「VL・花・16光・円環型」が、「VL正立像・別府大学・オリーブ枝葉・大日」と併存していたことは意義深い。両者が、東西文化の融合を意図したかのように見事に整合しており、独創性に溢れている。

さらに墨書「円通」は、「“VL”真理はわれらを自由にする」という高遠な精神と融通していた。即ち「円通」、は「真理と自由」を顕現し、あたかも必然であるかのように建学の精神と合致していた。さらに現在のキャンパスの古地名「円通寺北石垣82番地」の「円通」との有縁は、一層意味深長で、かつ感慨深い。「円通」という至言によって、大学と敷地は、密接かつ有意義に関わり、正に“Genius Loci”と大学が歴然と融和している。奇遇にも、浜松方廣寺総門には、方廣寺管長時代に足利紫山老師が揮毫した『地自有霊』の扁額が、泰然自若と据えられている(注53)。

謝辞：調査に際し、別府大学法人事務局・同窓会事務局・下記諸氏の協力と資料提供を得ることができた。ここに、ご厚意に対し感謝の意を表したい。以下、敬称略。盛本功爾郎、飯沼賢司、段上達雄、山本晴樹、根之木英二、吉岡義信（前附属図書館）瀬戸山賢介、三重野理恵、栗林美優、姫野えみ子（附属図書館）、巨島善道（方廣寺）。

注

1：佐藤瑠威「Veritas Liberat 出典探索始末記」『アルゴノート№23』別府大学図書館報 1987年 pp.6-7. ／佐藤瑠威「『真理はわれらを自由にする』について」『佐藤義詮先生七回忌記念文集』1993年　pp.107-108.

2：中尾由子「佐藤義詮先生・女専創立の頃」『佐藤義詮先生七回忌記念文集』平成5年 pp.55-56.

3：バッジの輪郭を“University”の「U一字型」ではなく、竪琴型とする根拠は、1950年創設の別府女子大学の英語表記を“Beppu Women's College”で示し、“Beppu Women's University”ではないことから、女学院時代も“University”ではなかったと考えられる。学校法人佐藤学園80年記念誌編纂委員会『学校法人佐藤学園の80年』（1987年） p .98. 参照。掲載写真の校門柱には、英語表記が確認される。なお、L字イニシャルバッジは、“Literature（文学部）”を示すもので、別府女子大学時代のものと推測される。ちなみに黒沢隆朝によると、ギリシアのLURAの起源は「ヘルメスが発見したことになっているが、彼

は亀の甲に、二本の牛の角をたて、これを支柱にして横木をわたし、亀の甲の端に穴をあけて、九人のミューズにかたどって九本の亜麻糸を通して作った。そしてこの新楽器を、アポロンの神杖と交換した」という（黒沢隆朝『楽器の歴史』音楽之友社 1978 年 p .151.）。

４：佐藤義詮「ミニチュア大学の四十年」文部省高等教育局学生課編『大学と学生　第 245 号』1986 年 pp.36-37. この文章は、昭和 61（1986）年 11 月開学 40 周年記念式典で配布したパンフレットにも転載したことがある。上記について、盛本功爾郎よりご教示を得ることができた。

５：佐藤義詮記念館展示の同名書２冊の内１冊は、刊行時のままで中に竪琴の挿図も明瞭に見えるが、もう１冊は補強のため新たに両表紙を付け、その内側も新たな白紙で覆う。故に中の挿図が隠れて全く見えない。

６：小西友七／南出康世『ジーニアス英和辞典　第３版』大修館書店 2002 年 p.1127.

７：『古希臘歌謡考』から転載。バルビトス（７弦）奏者は、オリーブの枝葉を冠として被っている。

８：『玻璃』p.13. 参照

９：『同書』p.20. 参照

10：沓掛良彦『ギリシアの抒情詩人たち ー竪琴の音にあわせー』京都大学学術出版会 2018 年 p.154.

11：高津春繁『古代ギリシア文学史』岩波書店　1977 年　p.24.

12：『同書』pp.66-67.

13：『同書』p.103

14：佐藤義詮「古典文学におけるホメロスの伝統」『別府大学紀要 第 17 号』別府大学会 1976 年

15：『希臘詩序説』pp.48-49.

16：『希臘詩序説』pp.60-61. 佐藤義詮は、序において著者名を「J・E・ヱドモンド」と誤記しているが、正しくは「J・M・EDMOND」である。出版の経緯について、J・M・EDMOND 編著　“Lyra Graeca” の第３巻 “An Account of Greek Lylic Poetry”（1922）を底本とし飜訳したことを断っている。なお “Phormigx” は『古希臘歌謡考』において “FORMIEX”（p.42.）と表記するが、音楽事典は、“Phorminx（ﾎﾟﾙﾐﾝｸｽ）” と明記する（下線仲嶺）。『音楽大事典 第５巻』平凡社 1983 年 p. 2749. 参照。

17：高畠純夫『図説　古代ギリシアの暮らし』河出書房新社 2018 年 p.61. 挿図を転載。

18：「ｱﾙｶｲｵｽとｻｯﾌｫｰ」前 480 年頃、ﾌﾞﾙｺﾞｽの画家　アッティカ派　赤絵式ｶﾗﾄｽ型ｸﾗﾃﾙ　シチリア、ｱｸﾞﾘｼﾞｪﾝﾄ出土　ミュンヘン国立古代収集／古代彫刻館。水田徹『世界美術大全集 第４巻ギリシア・クラシックとヘレニズム』小学館 1995 年／挿図 29 を転載。沓掛良彦はバルビトスについて、以下のように述べている。「レスボス島の詩人たちによって、同じ竪琴でもそれまでのリュラやキタラに比べて弦の数が多く音域が広い、バルビトスが用いられようになったことが、抒情詩の急速な発展をうながすこととなった。ピンダロスによれば、バルビトスを発明したのは、レスボスの詩人にして音楽家テルパンドロスだという」沓掛良彦『前掲書』p.35.

19:「アルゴノート ARGONAUTES　別府大学図書館報（季刊）第１巻第１号）」1978 年７月 15 日発行による。

20：高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店 1990 年 p.35.

21：赤像式円柱クラテル オルペウスの画家 前 440 年頃　ベルリン国立美術館蔵　松島道也・岡部紘三『図説ギリシア神話　英雄たちの世界篇』河出書房新社 2002 年 p.64. 挿図を転載。

22：高津前掲『ギリシア・ローマ神話辞典』p.90.

23：『世界の美術館 アテネ美術館』講談社 1968 年）／図版 48「戦車と戦士」（前 500-490 年）を転載。
オリジナルは、４頭立戦車と判別できるが、バックルデザインの馬は３頭立に見える。

24: 書体について以下の URL を閲覧した。https://www. behance. net/gallery/435347/Funky-Bould-(free) Access　2020/09/21

25：牧野富太郎『改訂版 原色牧野植物大図鑑 合弁花・離弁花編』北隆館 1996 年 /p.354. 挿図を転載。

26：注 25 と同じ、説明文を引用。

27：『万有百科大事典 19　植物』小学館 1972 年 pp.107-108.〈春山行夫〉

28：『世界大百科事典』平凡社 2007 年 p.397.〈柳宗玄〉

29：『日本大百科全書４』小学館 1985 年　p.404. オリーブ〈湯浅浩史〉

30：三浦一郎編集『世界の大遺跡５　エーゲとギリシアの文明』講談社 1990 年／ｐ .140. 挿図を転載。

31：ナイジェル・スパイヴィ著・福部信敏訳『ギリシア美術』岩波書店 2000 年／ヘファイスティオン・図 124 を参照・転載。

32：前 400 年頃、イタリア、ルーヴォ出土　ナポリ国立考古博物館所蔵。水田徹『世界美術大全集第４巻ギリシア・クラシックとヘレニズム』小学館 1995 年／図 96「ﾌﾟﾛﾒｽの周辺画家　アッティカ派赤像式萼型クラテル断片、神々と巨人たちの戦い」を参照。

33：前５世紀、イタリア・アプリア出土、大英博物館所蔵。ﾏｲｹﾙ・ｸﾞﾗﾝﾄ／ｼﾞｮﾝ・ﾍｲｾﾞﾙ著／西田実他　訳『ギリシア・ローマ神話事典』大修館書店 1988 年 p.494. 挿図を参照。

34：字と花は白、円環帯部は臙脂、光芒は金、ただし中央小円部は紺色が付く。

35：字は白、光芒と花は金、円環帯部は青、ただし中央小円部に白、その中に赤丸の各色が付く。

36：同窓会事務局で調査したところ、金・銀バッジを 1988 年まで学生に贈呈したことが判明した。

37：VL 書体は、これのみ角ゴシック体であるが、バッジの実物はなく、印刷物でしか確認できない（1973 年６月１日付「別府大学同窓会報」参照）。河内一郎教授は、1951-1970 別府大学附属高校勤務、1970-1983 別府大学短期大学部勤務。

38：1991 年６月 20 日刊行『別府大学通信』が、従来のタブロイド判年２回からＢ５冊子季刊となった。それと軌を一にして新ロゴデザインが確認される。同年 11 月 19 日大分キャンパス起工式。

39：『アルゴノート№１- ８』1965 年 -1968 年。№１- №６まで『別府大学ニュース』、№７- №８まで『別府大学学園通信』として刊行。1968 年№９をもって休刊。なお、この時期の 1966 年「創立 20 周年記念式典（別府国際観光会館）において掲揚された幡（旗）に円環型のロゴデザインが確認される。円環下半分の弧状帯部に “VL” が右向き正立像で表示されている。一方、円環型上半分は写真が途切れているが、かろうじて “Beppu University” の一字 “B” が見える。この時期に円環型ロゴデザインは、Ⅰ・Ⅲに加えてこのデザインの３種が併存していたことが判明する。三十周年記念誌編集委員会『別府大学の三十年』1978 年　口絵 14 を参照。

40：佐藤学園 80 年記念誌編纂委員会『学校法人佐藤学園の 80 年』p.607.

41：高津前掲『ギリシア・ローマ神話辞典』p.26.

42：マイケル・グラント / ジョン・ヘイゼル / 西田実他訳『ギリシア・ローマ神話事典』大修館書店 1988 年 pp.493-494.

43：中村元『仏教語大辞典』東京書籍 1985 年 p.1285.

44：内田啓一監修『密教の美術』東京美術 2008 年 p.22.

45：岩本裕『日本仏教語辞典』1988 年 平凡社 p.101.

46：墨蹟は、額装、外寸・縦 66,　５cm　横 127,　５cm ／本紙・縦 50,　５cm ／横 86cm。以下足利紫山について臨済宗方広寺大本山方広寺 Web サイト（下記 URL））を参照した。
「明治 27 年 10 月大分市萬壽寺住職となり僧堂開単、この時足利に改姓している。大正 15 年萬壽寺を退任、清水の鉄舟寺に隠棲する。昭和２年、方廣寺派管長に就任、開山堂を再建し、禅堂再興。昭和 16 年臨済宗十三派合同の初代臨済宗管長に就任。昭和 21 年、方廣寺派管長を辞し萬壽寺に帰山。昭和 27 年方廣寺派管長に再任、山門を再建。明治 29 年大分育児院を創立、昭和 29 年奥山老人ホームを建設するなど社会事業にも尽力した」。上記内容から判断すれば、1954（昭和 29）年には、既に大分萬壽寺を離任している。http://houkouji.or.jp/kancho.html　Access 2020/10/18

47：松村明監修『大辞泉』小学館 1998 年 p.315.

48：古田紹欽・金岡秀友・鎌田茂雄・藤井正雄『仏教大事典』小学館 1988 年 p.96.

49：中村元『広説佛教語大辞典 上巻』東京書籍 2001 年 p.142.

50：『学校法人佐藤学園の 80 年』別府大学 昭和 1987 年 p.48. 挿図参照。

51：沓掛良彦『前掲書』p.16.

52：「建学の精神　真理はわれらを自由にする」『学生生活』別府大学 2020 年 巻頭言より抜粋。

53：扁額「地自有霊」は、足利紫山老師が昭和２（1927）年（68 歳）頃の揮毫か。方廣寺巨島善道教務部長からのご教示。脇に「方廣閒雲 」銘はあるが、老師の年齢を示す文字はない。

図版一覧

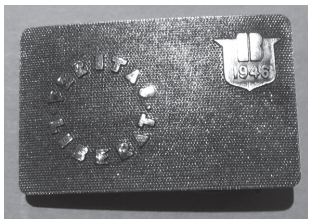

図 1-① バックル表
1946（S21）年銘

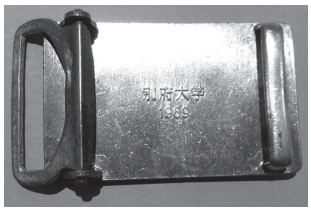

図 1-② バックル裏
「別府大学 1969 年」銘

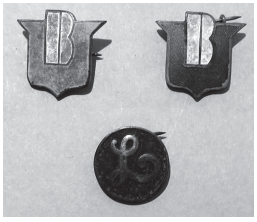

図２　竪琴型バッジ（上）
L 字イニシャルバッジ（下）

図３　リュラ
（『古希臘歌謡考』）

図４　バルビトス
（『古希臘歌謡考』）

図６　サッポーとアルカイオス
（バルビトス）

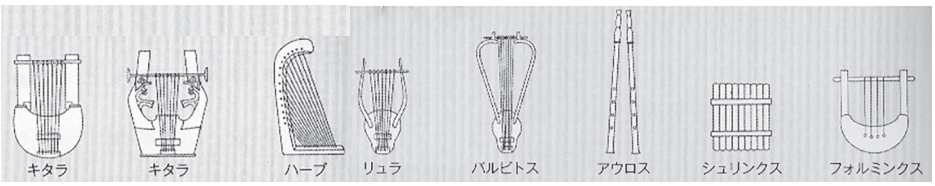

図 5-①　古代ギリシアの楽器

図 5-②　キタラ

図７　トラキア人の間で歌うオルペウス
リュラを演奏

図８－①　バックル（戦車）

図８－②　戦車と重装兵

図９　バックル
（VL と中黒点)

図 10　バックル
(VL のみ)

図 11　バックル
（VL と十字形光芒）

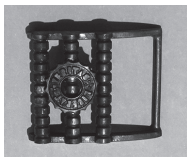
図 12　バックル
（VL・花・16 光・円環型）

図 13　バッジ
（VL・花・16 光・円環型）

図 14　ピンバッジ

図 15　1960 年 -61 年
（別府大学入学案内書）

図 16 -① オリーブ
（４弁花）

図 16 -②　オリーブ
（枝葉）

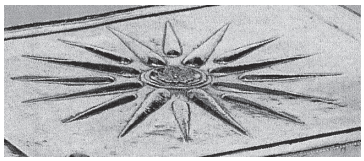
図 17　ヴェルギナの太陽（16 光芒）
（フィリッポス２世の納骨箱）

図 18　16 光芒の太陽
（ヘファイストス神殿天井）

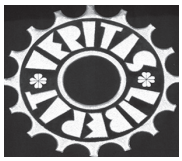
図 19　第１体育館

図 20　創立 80 周年
記念式典（1986 年）

図 21　同窓会バッジ

図 22- ①
1965 年度入学案内書

図 22- ② 1967 年度
学生募集ポスター

図 23　1973 年
河内一郎デザイン

図 24　2008 年
100 周年記念館

図 25 1992 年度
大学案内書

図 26　1992 年
同窓会名簿

図 27 -①　アルゴノートNo. 8 表紙　1968 年

図 27 -② 左同No. 8
（４頁掲載ロゴ）

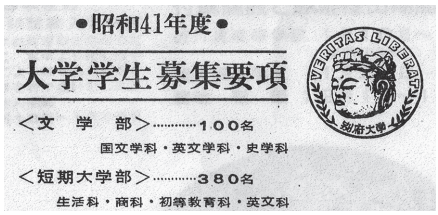

図 28　1966 年度学生募集
1965 年 11 月 26 日大分合同新聞夕刊

図 29「円通」足利紫山揮毫
「閒雲九十五（1954 年）」

図版出典

図１-①・②　図２　図８-①　図９-14：佐藤義詮記念館蔵　／図３・図４：佐藤義詮『LYRA GRAECA 古希臘歌謡考』 金洋堂書店　昭和９年　／図５-① 高畠純夫他『図説 古代ギリシアの暮らし』河出書房新社 2018年 ／図５-②・　図６：水田徹編集『世界美術大全集 第４巻ギリシア・クラシックとヘレニズム』小学館 1995年　／図７：松島道也・岡部紘三『図説ギリシア神話　英雄たちの世界篇』河出書房新社 2002年　／図８-②：『世界の美術館 アテネ美術館』講談社 1968年　／図15：別府大学入学案内書 (1961-62)　／図16-①：牧野富太郎『改訂版 原色牧野　植物大図鑑　合弁花・離弁花編』北隆館　1996年　／図16-②：筆者撮影　／図17：三浦一郎編集『世界の大遺跡⑤エーゲとギリシアの文明』講談社　1990年　／図18：ナイジェル・スパイヴィ著・福部信敏訳『ギリシア美術』岩波書店 2000年　／図19：別府大学第１体育館蔵　筆者撮影　／図20：創立80周年記念式典会場（第１体育館）掲揚、『1987年初等教育科卒業記念アルバム』　／図21：別府大学同窓会事務所蔵　／図22-①：　1965年　入学案内書　／図22-②：1976年学生募集ポスター、『創立100周年記念誌百年の歩み』学校法人別府大学　2008年　／図23：「別府大学同窓会報」（1973年６月１日付）／図24：2008年100周年記念館設置 ／図25：1992年度　大学案内書　／図26：1992年同窓会名簿　／図27-①・②：アルゴノート№８ 1968年 ／図28：大分合同新聞　1965年11月26日夕刊　／図29：墨蹟「円通」（別府大学蔵）